

## 「あるべき論」と「実践活動」のバランスを



山本卓朗  
論説委員長  
シビル NPO 連携プラットフォーム  
代表理事

土木学会論説もスタートから 7 年を経過した。改めてページをめくってみると土木の課題が時宜に適切で取り上げられており、向かうべき方向を具体的に示唆していることが読み取れる。しかし一方で、その課題解決に向けた取り組みがどこまでなされているかを考えると、「あるべき論」に留まっただけで「実践活動」が遅れがちであることが悩ましいところである。

言うは易く行うは難し、土木の課題は概して大物かつ難物であることは、論説を見てつくづく思うことである。かと言って「あるべき論」を報告書にまとめ、雑誌に掲載し、セミナーで議論するにとどまっただけでは、課題山積の状態から脱却することは難しい。「実践活動」には二つの側面がある。一つは、解決に向かって一步一步確実に積み上げていくやり方、研究や技術開発はその典型である。鉄道の高速度で時速 300 キロに達するのに何十年もかかる道理である。もう一つは、コツコツと賽の河原の石積みを重ねていく間に合わないで、総合プロジェクトとして組織を挙げて取り組み、一気に前進させるやり方である。東海道新幹線は長年の技術の蓄積を土台にして総合プロジェクトとしてまとめ上げ、世界の鉄道ルネッサンスを実現したものであると言える。

土木学会活動の中から具体的な事例を取り上げることとしよう。

土木国際化の問題は、10 年以上にわたって学会誌の特集もしばしば組まれてきた難題である。周辺諸国の伸張は目を見張るばかりであり、我が国の立ち遅れがますます顕著になってきた感がする。現在各分野で取り組まれている活動は、おもに個別プロジェクトへの対応であり、その規模とスピードでは今後長く諸国の後塵を拝すること必定である。中でも我が国の弱点である縦割りの壁から脱却できないことがネックになって、国際化戦略を土木総合プロジェクトとして全組織的に取り組む道が閉ざされていると思う。国際化というテーマは、他分野はいざ知らず、土木にとっては、たいへん厄介な課題である。海外で学びかつビジネスで鍛えられてきた方はまだ一部に過ぎず、語学を必要とする業務に対応できる人材が圧倒的に不足していると思う。その最大の理由は、高度成長期においては、

技術者を必要とする国内業務が無限にあり、公共事業の低迷する今日においてさえも、新たな防災関連などが加わり、依然として同様な状況にあることではなからうか。国際化を抜本的に推進強化しようとするならば、語学をはじめとして海外ノウハウの取得のための専門教育・海外研修・OJT などを基本的に見直し、多角的にかつ多人数を対象にした養成に力を注ぐべきと考える。学会誌 2012 年 1 月号の新年あいさつで「土木学会国際戦略を本格化する」と宣言し、4 月に国際センターを立ち上げた。実践活動を確実に進めるには、それを推進するしっかりとした組織の構築が不可欠である。組織をつくり人事が継承されれば、紆余曲折があっても持続する。しかし学会の国際センターも現状は国際化推進のごく一部でしかない。数年前に土木の改革をテーマに議論したとき、国際化については全体を統括する司令塔の欠如が話題になった。産学官のソサイエティである土木学会が司令塔たる役割を果たし、海外戦略を土木界全体の総合プロジェクトとして実践するよう努力すべきではないか。

もう一つの事例として建設業の将来ビジョンと実践活動について述べておきたい。2007 年から 2009 年の学会誌論説第 3 回「誇りを持って建設業を語る」、第 12 回「建設業の魅力回復を」、第 26 回「建設業の適正利潤確保について」において建設業に的を絞って投稿した。当時の日本土木工業協会における活動と連動して学会誌で PR したものであった。国内需要の低下や国際競争も視野に入れていたものであったが、建設業界の改革も課題山積で、今日なお苦吟が続いているように見える。建設業についても「あるべき論」はほぼ出尽くしたといつてよいであろう。後は国際社会での活動をしっかりと視野に入れて、総合プロジェクトとして改革の実践に取り組んで欲しいと思う。

失われた 20 年といわれる停滞の時代を経て土木学会 100 周年を迎えた。学会では「社会と土木の 100 年ビジョン」を公表する予定であり、また学会誌論説では「50 年後の国土への戦略」をシリーズにして掲載中である。将来に向けた「あるべき論」は極めて大事である。私たちは何処に向かって進むのか、はっきりとベクトルを示す必要があるからである。その一方、我が国の土木を取り巻く環境を考えると、山積する課題解決にのんびりと時間をかけて取り組む余裕はないのである。「あるべき論」を軸にして課題解決に向けた「実践活動」に多くのエネルギーを集中することを願うものである。